

本号は記念すべき第10号である。よくここまで来られたものだと感慨深い。思えば、2009年9月に天台山の調査の帰りの車中、山下一夫さんと鈴木健郎さんが、現地調査の興奮もあって、調査結果を発表する報告書を雑誌形式で発刊すべきだと盛り上がった。山下氏は、すでにほかの研究会で雑誌を続けている経験があり、実行可能との目算があったのだ。しかし、研究代表者として私は慎重だった。そういうものはいったん始めると3号で終わるのが落ちだ。編集や版下作成の負担が軽くないからである。1号は山下さんが版下を作り、きれいにしあがった。こうなると、年度で研究成果をまとめられ、成果の発信力も強いという研究上のメリットもあり、編集が楽しくなった。とはいえ、2号以降、もし古賀弘幸さんのご協力をいただけなかったならば、決してここまで来られなかったことを特に記して感謝を表したい。古賀さんは、書道や文字やタイポグラフィに詳しく、『文字と書の情報』（工作舎）という専著も出しているエディターである。

研究的には、何といっても三浦國雄先生の名著『中国人のトポス』（平凡社）の啓発と、現在まで続く先生の洞天思想研究を追いかけた結果である。シッペール先生からの啓発は、追悼文をご覧いただきたい。研究分担者の方々の投稿はもちろん、研究協力者の先生方の理解と寄稿に心から感謝申し上げたい。

今号は第10号を記念して、数人の方に特に寄稿を依頼した。

葛兆光先生は、2020年前期に東京大学に逗留されたのでお会いしたかったが、コロナ流行が悪化したため、結局お会いしないうちに帰国された。そこで10号記念に本論文の寄稿をお願いした。朝鮮と日本における道教の受容の問題と受容のありかた、研究者の態度や視角について綿密に検討された長篇で、紙幅の関係で分載にした。

土屋の論文は、玄宗の道教の特徴について、葛先生の論をうけて朝鮮と日本への道教の「伝教」というテーマから考えようとしたものである。

森和也氏の論文は、日本における道教の受容と発展の一つとして考えられがちな平田篤胤の道教研究について、平田の思想による道教研究の意義を検討することを通してとらえなおした力作である。本論も寄稿を依頼したものである。

大西和彦氏の論文は、ベトナムの道教・洞天思想のありかたに関する一連の研究のひとつである。この論文で扱われる洞天福地は、もともと中国王朝の境域内にあったものが移動してきた場合である。つまり、洞天福地は場所を移動させるのである。その背景には、ベトナムの地質や景観の問題と、中国王朝からの移民の問題がある。これは、道教ないし洞天思想の外国への伝播現象のベトナムにおけるケーススタディであり、葛兆光論文の参照系となりうる内容を持っている。大西氏は、東アジアの道教を考える際にもっとも手薄になりがち

なベトナムの道教を専攻されており、貴重な論文をつぎつぎに出されている。本誌でも第6号に「16世紀ベトナムにおける道教の展開」という論を発表していただいた。

山下一夫氏の論文は、第一大洞天である王屋山に関連する神仙と薬物の関係を明らかにしたもので、洞天と神仙と薬物という三者の関連から、ある種の信仰実践が生じたことや、祭祀の場の変遷ないし移転を追跡している。本論が、薬商人の移動だけでなく、王朝の境域内の移民にも注目しているのは、大西論文に共通する重要な視点である。

廣瀬直記氏の論文は、第八大洞天を主宰する神仙である茅君の基礎資料「茅君内伝」の訳注研究である。本誌第9号に発表した部分の続き。読むにつれて、古い内容を伝えている感じがする。

大形徹氏の論文は、幕末明治の著名な画家である富岡鉄斎が、洞天福地をそれと意識して作品に描いていることを論じている。鉄斎はちゃんと『雲笈七籤』を読んでおり、その点では平田篤胤ともつながってくる。美術史に対する洞天思想の影響を考える視点は今後掘り下げられるべきである。

李松先生の論文は、『中国道教美術史』（湖南美術出版社、2012年）の「前言」の翻訳である。本書は、道教美術史に関する世界初の専著だ。可能な限り現物にあたり、その写真を示して論じるという驚くべき努力と追求の成果である。しかも老子に対する宗教的崇拝に関わる美術としての道教美術だけでなく、先道教美術として戦国秦漢の出土品にも新たな見解を打ち出している。間違いなく今後の道教美術の里程標となる著作であり、その研究の基本的な考え方を述べたのが本論である。この前言を読んだだけでも、李松先生の視野の広さとウイットを感じさせられる。なお本書は、齋藤龍一さん・熊坂聡美さん、因幡聡美さん、廣瀬直記さん、そして私の共同で翻訳が終わっており、いま出版の準備を進めている。

最後に、シッパール先生への追悼文を掲載させていただいた。先生の訃報は、本誌を編集している途上で受け取った。そのあと、世界の道教研究者がネット上につぎつぎと追悼文を発表したが、北京の陶金氏と友人たちがそれを中国語に翻訳して中国国内に発信している。日本の道教研究者にとっては、ネット上に自分の書いた追悼文を発表するという行為に違和感があるのかもしれない。おそらく日本道教学会の機関誌でしかるべき人によって追悼がおこなわれるだろう。私は、シッパール先生の学恩に感謝する意味で、個人的ながら日本からも急いで追悼の意を示したいと思ったのである。本誌の追悼文は、おそらく日本で初発の追悼文として中国語に翻訳され、ネット上に発表されるだろう。

末筆ながら、出版が遅れたことをお詫びするとともに、ご協力いただいた方々に感謝いたします。(M.T)